第6学年〇組　グローバル・スタディ科学習指導案

令和 7 年 7 月 3 日（木）　第 6 校時
授 業 場 所　　6 年　　組　　教 室
授業者
在籍児童数　男子　名　女子　名計　名

1. 単元名　PROGRAM 3 “Our Dream Town”

2. 単元について

1)　児童について

①　児童の実態

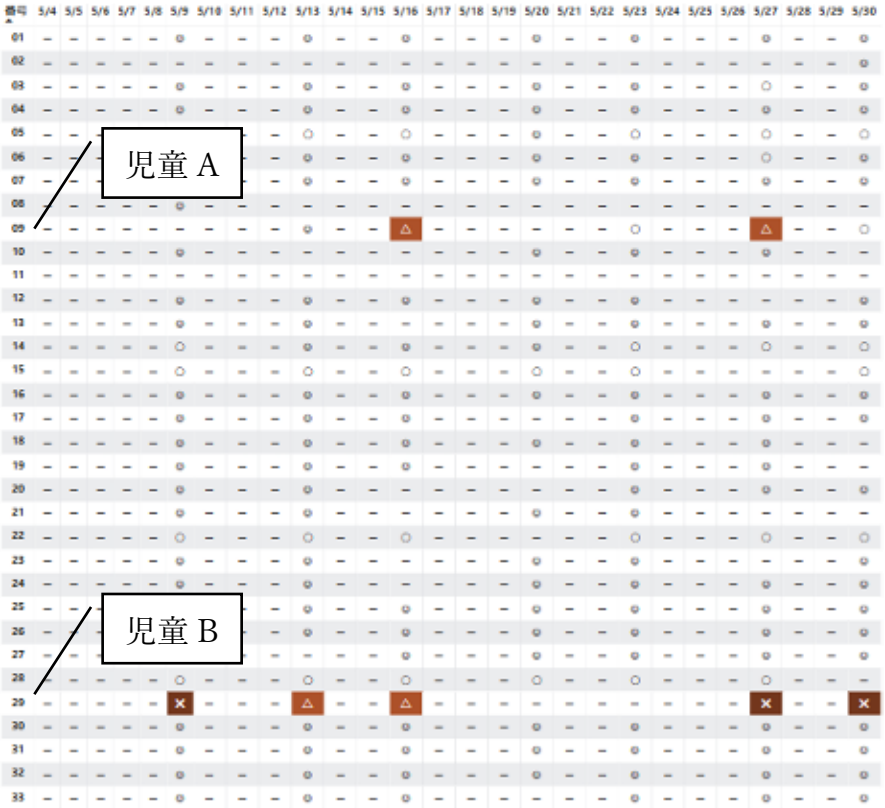
本学級は、全体的に学習規律が整っており、「聞くこと」「書くこと」などの活動は集中して取り組み、コミュニケーション活動では明るく、積極的に取り組んでいる。また、誰とでも仲よく話すことができる児童が多いため、心地よい雰囲気の中、コミュニケーション活動を楽しんで行っている様子が見られる。

外国語学習において、目的・場面・状況に応じて情報を整理し、必然性のある文脈でコミュニケーションすることで、児童は外国語における見方・考え方を働かせることができるが、本学級の児童は情報整理に苦戦する傾向がある。コミュニケーション活動を行う目的・場面・状況設定を十分に考慮せず、自分が何を言いたいか、という視点でパフォーマンス内容を選択する児童が比較的多くいる。

②　グローバル・スタディへの意欲と新出表現に対する発話への不安感

令和 6 年度さいたま市学習状況調査【生活習慣に関する調査】では、第 5 学年（現 6 学年）児童において、国際教育に関する項目で肯定的な回答が見られた。質問項目 60「『グローバル・スタディ』の勉強は好きですか。」に対する肯定的な回答は、市平均が 71.6%だったのに対し、本校は 85.0%であった。また、質問項目 61「外国のことについて、もっと知りたいと思いますか。」は、市平均の 79.3%に対し、本校は 90.6%の児童が肯定的な回答をした。また、グローバル・スタディ（以下 G・S）におけるスクールダッシュボードの「意欲」の回答では、表 1 に示すように 1 名の児童（児童 A）が 5 回中 2 回否定的な回答（「あまり楽しみではない」「楽しみではない」）をしており、1 名の児童（児童 B）が毎回否定的な回答をしているが、30 名の児童は「楽しみだ」「少し楽しみだ」を選択している（1 名は不登校のため未回答、1 名は特別支援学級所属のためデータに含まれていない）。

表１　スクールダッシュボード　「意欲」回答一覧（5 月分）



児童 A に否定的な回答の理由を聞くと、コミュニケーション（話すこと）が好きではないので、国語や道徳などの言語活動が多い教科にも苦手意識がある、という回答だった。G・S の中でも楽しい活動はあるかについて聞くと、「リスニングは簡単だから、まぁ好き。」と、答えた。否定的な回答をした 5/16 の授業はペアインタビューを繰り返す活動で、授業のほとんどの時間クラスメイトとコミュニケーション活動を行っていた。また、5/27 の授業も、新出表現を使って好きな都道府県でできることを伝え合う、コミュニカティブな活動を中心に行った授業だった。児童 A に対しては、コミュニケーション活動の中で肯定的な声かけをすることで自己肯定感を上げられるようにしながら、「書くこと」「聞くこと」などの活動を授業内で取り入れることで、自己効力感を上げられるように指導していきたい。また、児童 B は否定的な回答の理由について、「G・S だけでなく、全ての教科が苦手。」と回答している。実際、意欲に関してはほとんどの教科で否定的な回答をしているが、6 月 17 日の算数では「楽しみだ」と回答し、「今までやったことを生かしたいです」と自由記述に記している。その日の授業の様子について算数担当の教諭に話を聞くと、授業の終わり、「楽しみではない」を選択していたところに教諭が肯定的な言葉を掛け、その後選択を「楽しみだ」に変えたという。そのため児童 B に対しては、肯定的な言葉掛けを行いながら、自己効力感を与えられるようにしていく。

また、新出表現を使ってコミュニケーションを行うことに対する不安感は、クラス全体として低い様子が窺える。実際、PROGRAM 2 “You are a SAITAMA Jr. Promoter”の Lesson 2 で新出表現（It’s 形容詞., They are 形容詞.）を導入した日のスクールダッシュボードでは、回答した 26 名のうち 20 人が「できた」、6 人が「だいたいできた」と回答し、「あま

りできなかった」「できなかった」と答えた児童はいなかった。一方、記述欄では達成度に対して否定的な回答が 2 件見られた。(「よくわかりませんでした。次は言えるようになりたいです。」「今回、1 つのものと 2 つ以上のものの言い分けを知れたけど、これは、It's などと自分で判断することが難しかったです。」)

以上から、個人間に差はあるものの、クラス全体としての G・S に対する学習意欲は高く、新出表現を使用する際の児童の不安感は比較的低い傾向にあると考えられる。

③ 本単元内容の郷土への興味・関心

全体的な傾向として普段の G・S に対する意欲は高い一方、G・S の中でも社会的な内容を含む探求的な学習の時間に苦戦をしている児童が多い様子が窺える。PROGRAM 2 "You are a SAITAMA Jr. Promoter"の Lesson 1 で都道府県クイズ（Blue Sky p.24-26）に取り組んだ際は、英語を聞き取って白地図上の場所まで指をさせても、その都道府県がどこか分からない児童を多く見受けられた。また、「さいたま市には何があるか」という質問に自信をもって手を挙げて答える児童は少なかった。その日のスクールダッシュボードの振り返りでは、「都道府県クイズに全問正解できた」、といった回答が 3 件見られた一方で、「都道府県があまりわからなかった」、「少しわからなかった」と自由記述に打ち込んだ児童は、児童 C、児童 D のような回答を含め、14 件あった。また、児童 E はさいたま市への理解について不安感を記していていた（表 2）。

表 2　スクールダッシュボード　自由記述

児童 C	**久しぶりに都道府県をやってたまにあやふやだったけど、わかってたところもあってよかった**です。どんな英語を覚えてどう練習するか決めたので、がんばって練習したいです。
児童 D	今回の授業で都道府県クイズをして、**指差しはできたものの県名は言えませんでした**…どうしたら、都道府県の県名覚えられますかね？じかいも精一杯がんばろうとおもいます。
児童 E	タイトルだけだとどういう風に言ったらいいのか怪しかったけども出るパフォーマンスとかを見てどういう動画にするかイメージできました。**さいたま市の名所とかをあまり知らないので自分も発表するついでに知りたいと思います**。ある程度知っている人に発表するより伝えるのが難しいと思うので、できるだけ詳しく発表したいです。

※児童 E のコメント内の「も出る」は「モデル」の打ち間違いであると考えられる。

令和 6 年度さいたま市学習状況調査【生活習慣に関する調査】では、地域とのかかわりに関する質問について、表 3 のような回答が得られた。質問 17「『地域の人たちは、自分たちを見守り、支えてくれている』と思いますか。」、18「この 1 年間に、ボランティア活動に参

加したことがありますか。(住んでいる近所で行われる清掃やお祭りでのボランティアも含みます。)」については市平均との差が見られなかった。一方、19「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。」は市平均を 6.2 ポイント上回ったのに対し、16「今住んでいる地域の行事に参加していますか。」は 11.8 ポイント下回る結果となった。

表３　令和６年度　さいたま市学習状況調査【生活習慣に関する調査】

上段：学校の回答割合（%）　下段：市の回答割合（%）

○：肯定的な回答　■否定的な回答

地域とのかかわり等	16	今住んでいる地域の行事に参加していますか。(自宅近所のお祭りや清掃、さいたま市で行われているお祭りや花火大会等に行くことなども含みます。)	○	学校	63.8
				市	75.6
			■	学校	36.2
				市	24.4
	17	「地域の人たちは、自分たちを見守り、支えてくれている」と思いますか。	○	学校	95.3
				市	95.7
			■	学校	3.9
				市	4.3
	18	この１年間に、ボランティア活動に参加したことがありますか。(住んでいる近所で行われる清掃やお祭りでのボランティアも含みます。)	○	学校	34.6
				市	33.5
			■	学校	65.4
				市	66.5
	19	地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。	○	学校	92.9
				市	86.7
			■	学校	7.1
				市	13.3

この結果から、児童は地域や社会をよくすることに対して関心があるものの、知識的な理解や体験が十分でないと推測できるため、社会的な内容を含む単元では足場掛けが重要になるといえる。

④　SDGs への理解

第 6 学年の児童は昨年、総合的な学習の時間の中で SDGs について約 17 時間探求的な学習をしている。特に環境問題に焦点を当て、その中で気になるテーマを児童自ら選択し、プロジェクトに携わってきた。テーマは「フードロス」「リサイクル」「ごみ問題」「洋服プロジェクト」の 4 つで、野菜の皮を再利用するレシピを自治体に紹介したり、家庭でいらなくなったものをリメイクしたり、近隣の公園でゴミ拾いをしたり、大手ファッション企

業と連携して洋服を寄付したりするなど、それぞれの関心にあったプロジェクトに携わった。

SDGs の理解について調査するため、プレテスト及びプレアンケートを行った。「1. SDGs は、どんな世界をつくることを目標にしていますか。」という質問に対して、回答者 28 名のうち 11 名が「持続可能な社会」と回答した（図１）。また、「2. SDGs の 17 個の目標には、どのようなものがありますか。知っているだけ書いてください。」という質問には、24 名が１つ以上の正しい目標を挙げることができた。その中には、第５学年で扱った環境問題だけでなく、ジェンダー問題やパートナーシップなど、多様な回答が見られた（図２）。

図１　「1. SGDs は、どんな世界をつくることを目標にしていますか。| 回答結果

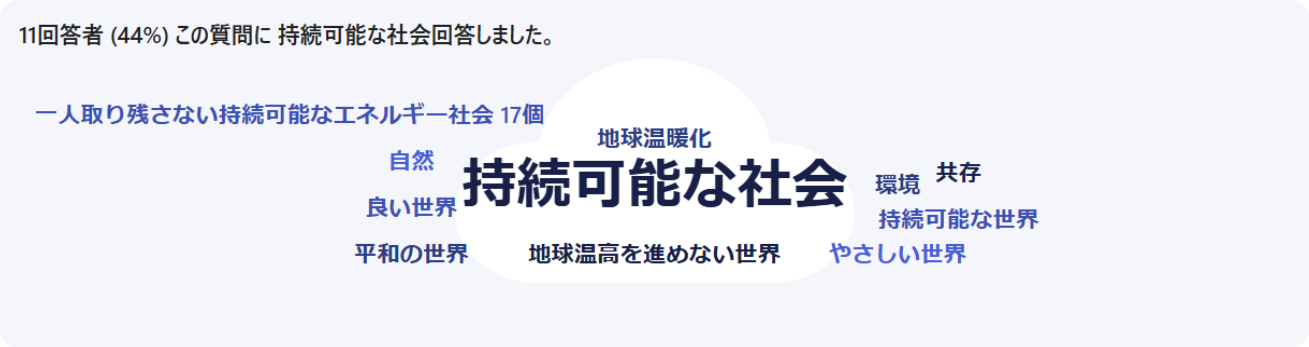


図２　「2. SGDs は、どんな世界をつくることを目標にしていますか。」回答結果

アンケートにおいては、「3. SDGs は、これからの世界に大切だと思いますか？」と「4. 3. を選択した理由」及び「5. SDGs について、日常生活でどれくらい意識していますか？」と「6. 5.を選択した理由」の２つの質問をした。3.の質問に対し、96%の児童が「とても大切だと思う」「やや大切だと思う」と肯定的な回答した一方（図３）、5.の質問の肯定的な回答（「常に意識している」「時々意識している」）は、68%だった。（図４）

3.の理由について、「意識しなかったら環境が壊れる」「世界中が平等に生きるためには大切」「SDGs は現在の地球で大きな問題になっているものを解決しようと作られたものだ

から。」という前向きな回答が見られた一方、「無理してやらなくてもいいと思う」「別に意識しなくても意識してもあまり変わらないし、自分は別に 17 全部じゃなくて 5 から 7 くらい、意識すればいいんじゃないと思うから。」といった後ろ向きな意見も見られた。また、5.の理由については、「5 年生の時に SDGs のことを学習して意識していこうと思って少しだけ意識してます。」「陸地を大切にしよう？みたいなのは意識しているけどその他は全然意識してないしそもそも SDGs じたい 17 のやつを忘れているから」「ポイ捨てをしない。５年生で調べたことを最も意識している」のような回答があった。

図 3　「3. SDGs は、これからの世界に大切だと思いますか？」回答結果

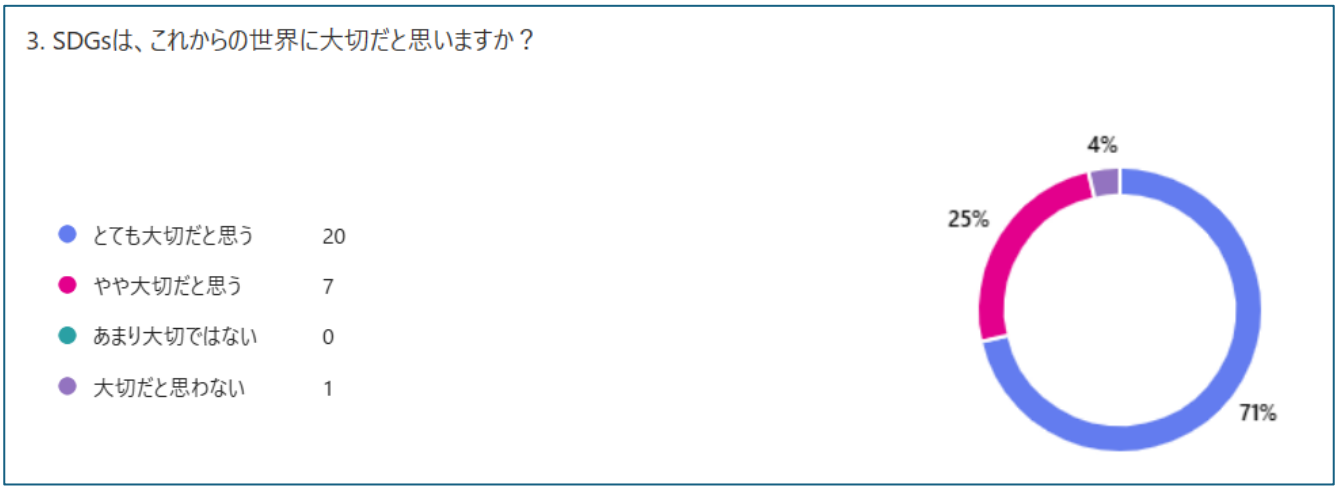
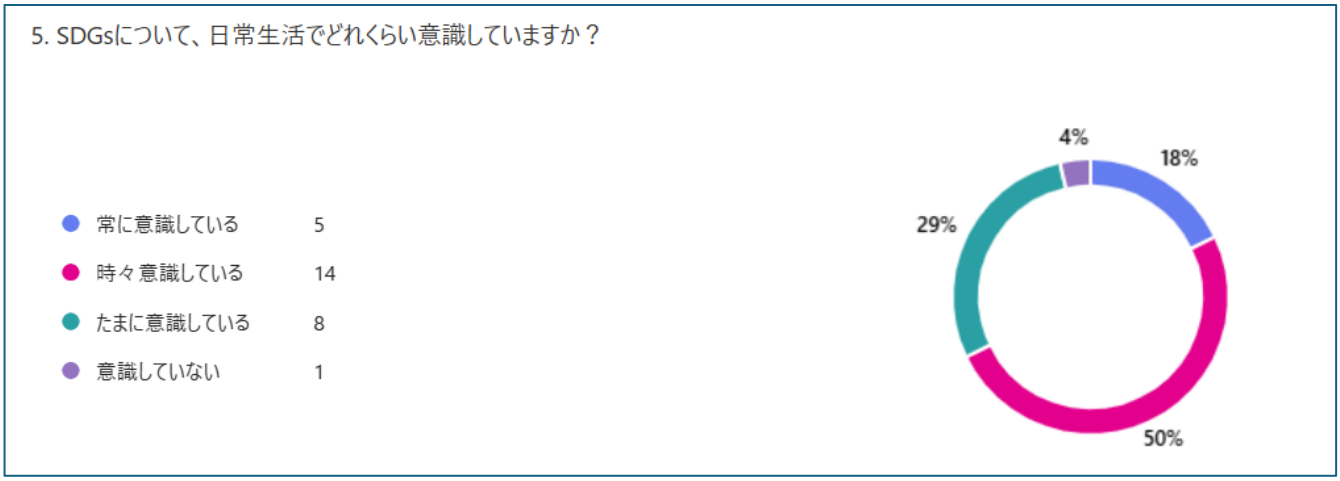


図 4　「5. SDGs について、日常生活でどれくらい意識していますか？」回答結果



以上から、全体的な傾向として児童は SDGs の目標とその重要性について理解しているものの、日常生活で SDGs を意識しきれていないことが分かる。これは、表 3 に示すさい

たま市学習状況調査【生活習慣に関する調査】において、19「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。」は市平均を 6.2 ポイント上回ったのに対し、16「今住んでいる地域の行事に参加していますか。」は 11.8 ポイント下回ったことの結果との関連が見える。つまり、第 6 学年の児童は地域や社会をよくするために何かすることや SDGs の取り組みの重要性について理解しているものの、行動に移しきれていない傾向にあると推測できる。そのため、SDGs について誰かにやってもらうことでなく、自分ごととして考えられるように指導していきたい。また、中には SDGs の目的や目標を理解していなかったり、SDGs に対して後ろ向きであったりする児童もいるため、探求学習では基本を振り返ると共に、その重要性も考えられるような機会を設ける。

2） 教材観

本単元のオリジナルテーマは、「町長として、町の人口を増やすために、町人が住みやすい『理想の町』について考え、その良さを伝える活動を行う。必要な施設や設備などとその理由について、SDGs の観点を交えながら、『理想の町』をアピールすることができるようにする。」ことである。本単元では、必要な施設や設備などについて発想の柔軟性や創造性が試される一方、社会的に本当に必要なものか、SDGs の取り組みとして妥当かなど、投票者からの視点で主張することが求められる。そのため、別所町や奈良町にある施設や設備などを挙げ、SDGs の観点から必要なものについて考える活動を、協働的に行っていく。

言語材料については、新たに We have ____. We need ___.が導入されているが、We は 5 年次の PROGRAM 8 Let's Travel Together でも導入されており、have に関しても 5 年次の PROGRAM1 Let's Make a Dream Day Schedule で使用しているため、We have の定着に困難を示す児童は少ないと考えられる。また、We have と We need の構造も似ているため、新出言語材料の習得に困難を示す児童は少ないと予想できる。一方、言語材料の自由度が高い分、必要な語彙が多くなると予想される。特に、You can ~に続く動詞の選択に児童が苦戦することが考えられ、目的語の語彙レベルも高くなることが予想される。

3） 指導観

児童観および教材観で示したように、本学級の児童は G・S に対する意欲が全体的に高い一方で、自国や郷土への興味・関心及び理解が低い傾向にある。G・S の目指す子ども像の中に「日本やさいたま市の伝統・文化に誇りをもち、将来にわたり、社会に貢献する子ども」があり、地域社会の一員としての自覚を持ち、意識を働かせる機会の確保が重要である。そこで今回の単元では、自分がよく知る生活地域を客観的に見つめ直し、よい街づくりについて考えることで、日本人やさいたま市民としてのアイデンティティの醸成に繋げら

れるようにする。また、自分の発表内容を客観視するために協働学習を導入し、聞き手の立場から内容改善を図る過程で、情報を整理・構築し、メタ認知を育む機会を設けていきたい。そして、教材観で示した通り語彙のレベルが高くなることが予想できるため、本単元の題材において汎用性が高い動詞や形容詞を G・S タイムで練習したり、リストアップしたりする。また、プレゼンテーションを行う際には聞き手が分かるように、写真やイラストなどの資料を用いたり、場合によって名詞は日本語使用を許可したりすることで、表現に幅をもたせられるようにする。

3. 「分かった」「もっとやりたい」子の育成を目指した指導と評価の手だて

学習の見通しをもったり自分の考えをもったりし、主体的に取り組めるようにするための工夫

手だて①　児童と共に行う単元計画の作成と目標の確認

単元のはじめに、何の表現を学びたいか、どのような練習がしたいかなど児童から意見を集め、単元計画を各クラスで作成する。また、毎授業で単元及び本時の目標、獲得したい普遍的なスキルなどを単元計画と照らし合わせて確認することで、児童が目標を意識できるような工夫を施す。

対話的な学びとなるための工夫

手だて②　コミュニケーションカードの活用

児童は、コミュニケーションカード（コミュニケーションを行った相手からサインと評価を貰うためのカード）を持っている。幅広くクラスメイトと関わって話し、様々なモデルを見たり他者から評価を貰ったりすることで、自分のコミュニケーションの改善に繋げられるようにする。

深い学びとなるための工夫

手だて③　学習に対する自己調整力を高める授業

自分は何ができて、何に課題があるかなどを記述できている振り返りを紹介することで、自己調整のための視点を与え、メタ認知の視点で学習内容を振り返ることができるようにする。また、コミュニケーションにおける目的・場面・状況を考慮できている児童にモデルを示してもらうことで、自己の非言語的表現や発話内容の改善の可能性に気づきをもたらせられるようにする。

個別最適な学び・協働的な学びとなるための工夫

手だて④　個々の習熟度に応じたレベル設定

コミュニケーション活動においてレベル１～３まで設定し、個人の習熟度に合わせて発話内容を選択・調整できるようにする。また、そのレベルについて相互評価をすることにより、自己の学習状況を客観的に把握する機会を設ける。

手だて⑤　探求的な内容における協働的な学び合い

社会的な内容に対して困難を示す児童が多いと予測できるため、奈良町、別所町にある施設や設備と必要なものについては、協働的にアイデアを出し合う。また、発表内容についても「町役場の職員」という立場に立った時に最適かについて客観的に考えられるよう、ペアやグループで協働的にアドバイスし合いながら取り組む。

4. 単元目標

町長として、町の人口を増やすために、町人が住みやすい「理想の町」について考え、そのよさを伝える活動を行う。必要な施設や設備などなどとその理由について、SDGs の観点を交えながら、「理想の町」をアピールすることができるようにする。【話すこと（発表)】

5. 単元の評価規準

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	・地域に必要な施設や設備とその理由の伝え方を理解している。（知識） ・地域に必要な施設や設備とその理由を伝える技能を身に付けている。(技能)	「理想の町」のアイデアのよさを伝えるために、必要な施設や設備などとその理由について、提案している。	「理想の町」のアイデアのよさを伝えるために、必要な施設や設備などとその理由について、提案しようとしている。

6. 言語材料

- We have ~、We need ~、This is SDGs Number __, We can~, It’s ~, Let’s enjoy~

7. 単元の指導と評価の計画(形成的評価→○　単元の総括的評価→●)

時	目標〈◇〉　学習活動（◯）　主な活動（ • ）　手だて	知技	思判表	主体
1	◇単元のゴールを知り、必要な表現について理解することができる。 ○ 単元の導入 ● 教師は、プログラムの概要と目標を導入する。 ● 教師は、モデルパフォーマンスを示す。			

	○単元の学習計画を立てる ● 児童は、モデルパフォーマンスから、自分だったらどんなことを紹介したいか考える。 ● 「理想の町」の発表のために、どんな情報があったらよいかについて話し合う。 ○ Activity 私たちの町にあるものを話し合おう ● 教師は、児童への質問から、We have ～.や施設の名前を導入する。 ● 教師は、児童から地域の施設名が出てこなくなったら、Do you（we）have a park?などと尋ねる。または、What do you have in Saitama City?とさいたま市に広げる。 **手だて①　児童と共に行う単元計画の作成と目標の確認** モデルパフォーマンスの視聴後、何の表現を学びたいか、どのような練習がしたいかなど児童から意見を集め、単元計画を作成する。			
2	◇自分の住む地域にあるものについて伝えることができる。 ○ Words and Phrases（Blue Sky p.38） ○ Listen and Do（Blue Sky p.38） ○ Mapping 児童は、自分たちの住む地域にあるものをマッピングする。 ○ Communication Activity ● 始めは、教師が児童に聞くようにする。 ● 児童は、マッピングをもとに、ペアで、自分たちの住む地域にあるものについて話す。 **手だて②　コミュニケーションカードの活用** 新出表現を使って技能を習得するにあたり、幅広くクラスメイトとコミュニケーションを行い、相手から見て学んだり相互評価し合ったりすることで、自分のコミュニケーションの改善に繋げられるようにする。	○		
3 (探求)	◇自分たちが住んでいる町の様子を知り、自分の地域について考えることができる。 ○ Did you know?プラス（Blue Sky p.48,49）		○	○

	● 児童は、教科書を読んで、問題に答える。 ● 児童は、SDGs について知る。 ○ 話合い活動 ● 児童は、奈良町・別所町にありそうなＳＤＧｓを出し合う。 ● 児童は、自分の地域でできそうなこと、あったら社会がよくなりそうなことについて、話し合う。 **手だて⑤　探求的な内容における協働的な学び合い** ICT を活用し、協働的にアイデアを出し合うことで、多角的な視点から内容選択できるようにする。			
④ 本時	◇自分たちの地域に必要だと思うものを場面･状況に合った方法で伝えることができる。 ○ Listen and Do ①（Blue Sky p.40） ○ Listen and Do ②（Blue Sky p.40） ○ Chant （Blue Sky p.41） ○ Communication Activity ● 始めは、教師が児童に聞くようにする。 ● 児童は、Lesson 3 をもとに、ペアやグループで、自分たちの住む地域にあるとよいものについて話す。 **手だて③　学習に対する自己調整力を高める授業** 町長としてふさわしい非言語的表現や発話内容の工夫ができている児童にモデルパフォーマンスをしてもらうことで､表現の幅の可能性に気づきをもたらせられるようにする。	○		
5	◇「理想の町」になるように自分たちの地域に必要なものを場面・状況に合った方法で伝え合うことができる。 ○ Warming up: Matching Game ● 教師は、ICT 端末でカードを配付する。（紙でも可） ● This is ～. のカードと It's good for ～.とを組み合わせて合うものをマッチングさせる。 ○ Chant （Blue Sky p.41） ○ Activity ① （Blue Sky p.41）			

	● 児童は、自分たちの住む地域に必要だと思うものとその理由について考える。 ● 児童は、友達と自分の住む地域に必要だと思うものを伝え合う。 ○ Activity ② （Blue Sky p.41） ○ Activity ①で伝えた内容を書く。 **手だて④ 個々の習熟度に応じたレベル設定** コミュニケーション活動ではレベル１～３まで提示し、自分で選択・調整できるようにすることで、学びの見える化を図る。			
6	◇グループで「理想の町」のために必要なものと理由を**場面・状況に合った方法で**伝えることができる。 ○Watch and Do（Blue Sky p.42） ○ Making a Presentation ● 教師は、モデルパフォーマンスを示す。 ● 児童は、モデルパフォーマンスの良かったところや改善点について話し合う。 ● 児童は、「理想の町」にするために必要なものとその理由が、より説得力をもつように発表内容を考える ○ Presentation trail 児童は、プレゼンテーションの練習をする。	○	○	○
7 (探求)	◇グループで「理想の町」をよりよく提案することができる。 ○ プレゼンテーションの準備 ○ communication activity: Group Presentation 動画で自分たちのプレゼンテーションを客観的に見て、どうすればよりよいプレゼンテーションになるのか話し合い、改善する。		○	○
8	◇住みやすい町を目指し、「理想の町」に向けたアイデアを、よりよく提案することができる。 ○中間発表会 ● 児童は、ペアでお互いのプレゼンテーションを見合う。 ● それぞれのよかったところや改善点を伝え合う。 ● 自分の発表を改善する。	○	○	○

9	◇SDGs の観点から、「理想の町」について発表することができる。 〇プレゼンテーションに SDGs の観点を加える。 ● 児童は、自分たちが発表するものは、ＳＤＧｓの何番にあたるのかを考える。 ● 教師は、This is SDGs Number ～.と表現できることを確認する。 ● 児童は、ＳＤＧｓの何番にあたるのかを協働的に確認する。	○	○	○
10	◇「理想の町」のアイデアのよさを伝えるために、必要な施設や設備などとその理由について、提案することができる。 〇聞き手の観点の確認 〇 Performance Test（住みやすい町を目指すアイデアの提案） 〇 Voting（町の運営会議） 児童は、町役場の職員として、住みやすい「理想の町」に、最適だと思った提案に投票する。	●	●	●

本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。児童の学習状況を記録に残さない活動や時間においても、教師が児童の学習状況を確認する。

8. を本時の学習指導（4/10 時間目）

1） 目標

自分たちの地域に必要だと思うものを場面・状況に合った方法で伝えることができる。

2） 展開

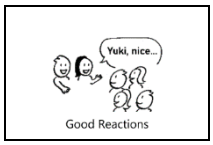
時間	展開、児童の活動	指導者の活動と使用英語及び発問例	△留意点　☆評価　〇手だて
導入 10 分	あいさつ 前回のふりかえり 単元及び本時の目標の確認	● 自己調整がうまくできている振り返りを紹介し、児童が本時の学びについてメタ認知の視点から考えられるようにする。	〇手だて③ 学習に対する自己調整力を高める。 〇手だて① 本時の目標を理解する。
	町長として、自分たちの地域に必要だと思うものを場面・状況に合った方法で伝えよう。		
	前回の学習内容の復習 ● Chant p. 39 ● モデルパフォーマ	● 代表児童 1 名と教師でモデルパフォーマンスを見せる。	△Skill が”Giving Reasons”と”Good Reaction”であるため、高いレベルを目指したい

	ンス及びコミュニケーション活動 ➢ コミュニケーション活動はペアで行い、自分のサインと相手のレベルをお互いのコミュニケーションカードに書く。	教師: I like Saitama City. We have Kita city library. We can read many books. 児童: I like Saitama City. We have ___. We can ● 教師はレベルを示す。 【レベル１】 “We have さいたま市にあるもの.” 【レベル２】 レベル１に加え、”We can できること.” 【レベル３】 レベル２に加え、リアクションや”It's 形容詞.”などの追加表現	児童はこれに加え、リアクションや追加表現（It's~, I want to ~, I like~など）を付け加えるように指導する。 〇手だて⑤ 自分でレベルを設定する。 〇手だて② コミュニケーションカードの活用
展開 10 分	本時の表現の導入 ● Listen and Do ① ● Chant p.41	“Let's check the answers.” “We need what?” “This is a new chant. First, let's take a listen.”	△We need を強調したり、答え合わせの際に児童から We need __.を引き出したりすることで、新出の言語材料に対して気づきを促す。

発展 20 分	モデルパフォーマンス コミュニケーション活動 ➢ コミュニケーション活動はペアで行い、自分のサインと相手のレベルをお互いのコミュニケーションカードに書く。 代表児童のモデルパフォーマンス	児童: What do we need in our town? 教師: We need 歩行者用信号. We can walk safely. 児童:リアクション 教師: What do we need in our town? 児童: We need a 子ども食堂. 教師: What can we do? 児童: We can eat healthy food. ● 教師はレベルを示す。 【レベル１】 “We need さいたま市に必要なもの.” 【レベル２】 レベル１に加え、”We can できること.” 【レベル３】 レベル２に加え、リアクションや”It's 形容詞.”などの追加表現 町長として、適切な非言語表現や内容が工夫されている児童をピックアップする。また、よかった点について子どもから引き出し、気づきを促す。	△名所や設備などについては、日本語で表現してもいいことにする。 △We need～, We can~に慣れてきたら、We have～やIt's～などを使い、理由を表現できることに気付けるようにする。 ☆奈良町・別所町付近で必要な施設や設備を理由とともに伝えている。【知識・技能】
5 分	振り返り 本時の目標を振り返る。	“Let‘s do 授業アンケート.”	△客観的な視点から自己の学習について振り返るような声掛けをする。

9. 板書計画

Lesson Title
自分たちの地域に必要だと思うものを伝えよう。



プロジェクター

〇前回の児童からの振り返り
〇デジタル教科書
〇コミュニケーション活動の内容
〇振り返りの視点